定式化作業と実践的行為¹

—精神科面接における会話を事例にして—

Doing Formulating in and as Practical Actions

水川 喜文

MIZUKAWA Yoshifumi

This paper is intended to be a reconsideration of formulations in and as practical actions, following H.Garfinkel and H.Sacks. First, Garfinkel and Sacks' ethnomethodology and conversation analysis are placed in the philosophical trend after the linguistic turn, as they analyse use of natural language in actual settings, including even formulations which are usually considered to be scientific procedures. Second, we restate their distinction between formulations and "doing formulating" in and as ordinary practical actions. Next, this practice is demonstrated in a setting of psychiatric interviews. Finally, we see "doing formulating" is a naturally organized activity, rather than a metaphysical procedure.

1. 若干の前提的議論

本稿では、H.GarfinkelとH.Sacks(1970)による定式化(formulations)の概念を実践的行為との関連で考察し、それをもとに精神科面接の場面²を用いて例証していきたい。ただ、日本における現在のエスノメソドロロジーと会話分析をとりまく状況を考えると、若干の前提的議論を行ってから考察を始めるべきだろう。それは、エスノメソドロロジーと会話分析の膨大な成果(Fehr; Stetson; Mizukawa 1990)を社会学がどのように評価するか、という今後に残された課題に関係してくるからである。そのため、まず、エスノメソドロロジーと他の研究領域について若干の考察を行い、次に、定式化の問題が、H.GarfinkelとH.Sacksによってどのように扱われたのか検討し、最後に、具体的な精神科の面接における会話データを用いて分析を行ってみたい。

『エスノメソドロロジー研究』(Garfinkel 1967)が出版されて以来、様々な評価や批判がなされてきたことは周知の通りである。日本に紹介された初期において、エスノメソドロロジーは、行為者の主観的な解釈過程を分析したり、奇妙な実験をして誤解や混乱を分析したりするといったものとして捉えられる傾向があった。そして、行為者の主観を把握したり代弁するとされたり、主体性を回復するという目標に対する実践と捉えられたりした。

一方で、会話分析の成果が発表されるにつれて、エスノメソドロロジーの評価が次第に変化してきていることがわかる。会話分析を応用した研究は、社会学において応用されるよりも、言語学や認知心理学、教育社会学などにおいて活発になされている。また、日本においても、会話分析そのものや、その発想を利用した業績が、近年次々に発表されている

ことも挙げられるだろう(メイナード 1993, ザトラウスキー 1993, 海保・原田編 1993)。

これに伴って、社会学における評価も、変化の兆しが見える。すなわち、会話分析の成果により、エスノメソドロジーは会話の経験的構造の分析であるという評価が行われはじめた。例えば、「日常の対人関係の研究を得意」とする(橋爪 1991:48)と評されたり、「相互行為のやりとりの循環を指摘するだけでは問題を残したまま」(西原 1991:321)と言われることになった。これには、日常的な言語行為を分析するだけでは、「全体社会」について考察できないし、社会的意味の「発生論」的視点を持ってないのではないか、という批判が込められているのだろう。

こういったことは、奇妙なことに、いわゆる「分析哲学」に対して行われてきた批判に類似しているように思える。分析哲学は、哲学的諸問題の解決(ないし解消)を言語の考察を通して行おうとする試みである(冨田 1993:183)。この分析哲学運動は、いささか強引にまとめてしまえば、論理実証主義という理想言語の研究(この中で実証主義は方法論的に確立された)から始まり、言語使用を詳細に分析するうちに、言語行為論やプラグマティズムへ展開・接近することになった。これがいわゆる言語的転回(the linguistic turn)(Rorty (ed.) 1967)である。これに対し、他の哲学からは様々な反応があった。例えば、現象学の立場からは次のように批判されることになる。すなわち、「私たちにとって重要なのは、言語使用の個々の現場よりも、その概念内容の妥当性・正当性・根拠にあるのだ」(渡邊 1991:78)。これを、エスノメソドロジーに対するコメントとして言い替えると、「私たちにとって重要なのは、会話実践の個々の現場よりも、それが成り立っている『社会』の成立の妥当性・正当性・根拠にあるのだ」となるだろうか。

この文脈からすると、エスノメソドロジーに対する一般的な違和感というものは、現代哲学史における、分析哲学と実証主義(大庭 1990)や、超越論哲学(竹市 1992)との対立・対比などを考慮して理解することもできるだろう³。もちろん、分析哲学とエスノメソドロジーが同じ思想を持っていると述べているわけではない。分析哲学と呼ばれる思想運動も、それ自体決して一枚岩の思想ではないし、その名称それ自体に問題点もある(石黒 1993: 87-92)。また、エスノメソドロジー自体も、現在様々な方向性を持っている(Maynard, D. 1991 水川 1992, 1993b, 岡田 1994)。しかし、エスノメソドロジー的発想の系譜をたどると、その中で、分析哲学的な発想(Coulter 1979)や「自然言語への反省的なまなざし」による社会学の問題の解決(あるいは、解消)という方向性が現れるのは確かである⁴。エスノメソドロジーは、実証主義の系譜との対立という文脈だけでなく、このような言語を扱う様々な分野における対立や統合の系譜に位置づけて考察する必要があるだろう⁵。

会話分析は、分析哲学におけるG. Fregeや前期L. Wittgensteinが行った世界の「論理学」という基礎的作業に匹敵する、日常的世界の「論理学」として理解できる。もちろん、論理学が単独で意義ある研究であると同じように、会話分析それ自体も、相互行為における言語活動の様々なパターンを見つけた点という点で、意義ある方法といえるだろう。会話分析は、相互行為を経験的に分析する可能性を示しただけではない。確かに、会話を構成する言語行為は、人間社会に最も特徴的な活動であり、社会的な意味の源泉となるものであるから、その社会的場面を詳細に分析しない限り、「社会」の分析はできないともいえるだろう。しかし、言語的転回とその後の展開を考慮すると、会話構造の発見という方向性だけでは、H. Garfinkelにいうエスノメソドロジー研究ではないだろう(水川 1993b)。H.

GarfinkelとH.Sacksが、会話への注目をどのようにおこなってきたかという点に注目しなければ、エスノメソドロロジーの課題は理解することができないと思われる。

エスノメソドロロジーは、社会秩序の（物理）科学的メカニズムの探求（実証主義）から、行為者の意味付与過程（現象学、意識の哲学）への転回を意味するのではない。むしろ、それは、このような社会秩序の「メカニズムの探求」や「意味付与」という作業が、自然言語の実践的使用という点で、いかにしてなされるかという問題への転回を行っているのである。自然言語の使用における方法(ethno-method)とは、こういった「意識から言語へ」さらには「言語から実践（プラクシス）へ」という文脈で考えるべきである。本稿で、定式化を問題にするのは、実際の社会的な場面において特徴ある言語使用の実践であると共に、エスノメソドロロジーと会話分析の方法を明確化にし、他の隣接分野との対比が可能となるからである。

2. 定式化の問題

H.GarfinkelとH.Sacks(1970) (以下FSと略) が問題にしたこの定式化とはどのような活動なのだろうか。それは、まず、定式化が言語活動の一つであるということをおさえる必要がある。エスノメソドロロジーにおいては、科学者が行う理想言語を用いた一見理念的と見えるような活動も、それが実際に自然言語を用いて行われる場面に立ち帰って考察されるべきだと考える。実証主義における「メカニズムの探求」作業、すなわち科学的な作業も、日常生活における「意味付与」作業、すなわち主観的・日常的作業も、自然言語を用いた「方法」という意味においては同じものとするのである。従って、科学者の秩序発見活動も、日常生活者の意味付与活動も、「社会学を行うこと (doing sociology)」という点からすると、実践的な社会学的推論(practical sociological reasoning)なのである(Garfinkel 1967:vii)⁶。ここでいう実践とは「私」という主体による「対象への働きかけ」という意味ではなく、実際の関心の下で「行っていること」それ自体を示す。つまり科学であれ、日常であれ実際の関心の下で「行っている」という側面である。「社会学的」とは、社会学の対象になる「社会的に組織された」活動という側面である。たとえ、数学の証明であっても、実際に証明をするという現実世界への言及をぬきに考えられず、「社会学的」な活動なのである(Livingston 1986)。

さて、定式化(formulations)も、この様な文脈で考えなければならない。定式化という用語は、一般に、理論を定式化するといったり、概念を定式化するという使われ方をする。すなわち、ある出来事を、言語を用いて公式化したり、定義したりという科学的活動を指す際に使われる。H.GarfinkelとH.Sacksは、定式化を特別な理想言語の問題としてではなく、自然言語の問題として捉え直して、科学的活動においても、日常的活動においても行われる実践的行為として考察した。

H.GarfinkelとH.Sacksが、この自然言語の顕著な特性として注目したのは、インデックス性(indexicality)である。インデックス性とは、自然言語の特性として、ある記述が環境(circumstances)を作り、その環境によってある記述が作られているという事態を指す（言語の意味が文脈によって「決定可能」であることを意味するのではない）。これは、C.S.PeirceやL.Wittgensteinなども扱ったインデックス的表現の持つ性質である(FS:348)。

インデックス的表現が、論理学者を長い間悩ませていた理由は、理念的に考察された理想言語と違い、言語が使われる場面ごとにレファレントが変わってしまうということだった (Lynch 1993:184)。それゆえ、L.Wittgenstein以前の論理学者や科学者は、インデックス的表現を客観的表現に置き換えようと様々な手段を用いることになる (Lynch 1993:185)。この手段は、インデックス性の矯正 (remedy) と呼ばれる。すなわち、科学的な探求においては、インデックス的表現は、客観的表現に、置き換えることが目標とされ、永遠に矯正され続けることになる。H.GarfinkelとH.Sacksは、社会学におけるこういった矯正のプログラムを、「構築的分析 (constructive analysis)」と呼んだ (FS:340)。定式化は、自然言語のインデックス性に対する一つの矯正手段である。

エスノメソドロジーが構築的分析と非対称的なのは⁷、インデックス性を矯正するための別な手段を提案するから (社会学的な科学主義) でも、インデックス性のために分析を放棄するから (認識論的懐疑主義) でもない (M.Lynch 1993:184,187)。これらは、定式化によるインデックス性の矯正について考察する際の、二つの問題点である。前者においては、社会活動の客観的な理解に到達するために、定式化の経験的な (科学) 探求をすべきだということになる。後者においては、定式化には、インデックス性という「問題」があるために、記述や説明というものは本来的に決定不能だということになる。

エスノメソドロジーにおいては、むしろ、インデックス性の矯正という作業が、構築的分析でも日常生活においても、実践的な社会学的推論として徹頭徹尾行われているということが例証されるのである。この視点に立つと、定式化とは、インデックス性を修復し、客観的表現へと明確化するためにメンバー⁸が行っている作業である。会話場面においては、メンバーが「理論化」することを指すといってもよいだろう。もちろん、定式化は、専門家の分析手段としてのみあるわけではない。メンバーが、名付け、説明し、ルールを引用するときにはいつでも行っていることである。H.GarfinkelとH.Sacksは、日常生活でもインデックス性の矯正をおこなう実践活動をしていると考えたのである。

そのため、定式化を考えるには、まず、言語の社会的現れである会話の場面に注目することが必要であろう。会話実践において、

メンバーは、会話のある部分を、その会話を記述したり、説明したり、その特徴を描写したり、解明したり、翻訳したり、要約したり、その要点を与えたり、規則とそれの合致に注目したり、規則からのその逸脱について発言したりする場として扱うこともある。メンバーは、会話のある部分をその会話を定式化する (formulate) 場として使用することがあるのだ (FS:350)。(下線部は、原文ではイタリック体)

例えば、次の様な会話である。

A：連邦政府が徹底的に調査して、殺人容疑で審議できると思いますか？

B：いいえ。

B：それは州 (政府) の問題です。

A：[では、こういう質問をさせて下さい] ⁹ (FS:351)

この会話で、Aは、次に「質問」をするだろうことがわかる。すなわち、次に生起する会話を「質問」として定式化しているのである。このような会話の定式化とは、次のような活動である。

会話の中で生起しているだろう他の全てのことと共に、会話者にとって会話の性質

であるのは、会話者が何かほかのことを行っているということ、すなわち会話者の行っていることが、我々の一行っている一ことを（あるいは何について我々が話しているのか、誰が話しているのか、我々は誰なのか、我々はどこにいるのか、など）－多くの一言葉を一用いて〔その言葉通りに〕言うこと(saying-in-so-many-words-what-they-are-doing)なのである、ということであるかもしれない(FS:350)。(〔〕内は水川)

つまり、定式化とは、ある会話について「多くの言葉を使って〔その言葉通りに〕言う」という点が肝心である。さて、上記の会話において、Aの最後の発話は、特別に違和感のある発話ではなく、自然な流れの中に配置されていることがわかる。しかし、冷静に考えてみると、これから質問をするのに、「質問させて下さい」と言っているのは、冗長であるとも考えられる。つまり、挨拶をするときに「挨拶をしますよ」と言ってから「こんにちは」と言うだろうか。あるいは、ふだん話しているときに、次に応答するときに「答えさせて下さい」といちいち言ってから答えるだろうか。質問をしたいなら、「定式化」をするまでもなく、疑問文を使えば質問になるのではないだろうか。このように考えると、定式化は、ただ単に会話を明瞭にするために行われているわけではないということがわかる。定式化を行う発話が頻繁に行われたなら、それは、むしろ、不適切な会話となるだろう(FS:353-4)。先に述べたとおり、「こんにちは」と言う前に、「挨拶をしますよ」と言ったり、「それは、質問じゃなくて意見ですね」と問い正したり、「いま、はぐらかしましたね」と指摘したりという定式化を、（その場面に組織化されない仕方）で幾度も行なうなら、定式化それ自体が、不適切で冗長な表現となるだろう。そればかりか、相手を非難するとか、困らせるとか、何か別なことを示唆しているものだともみなしうだろう(山崎 1993:344)。このような問題は、定式化と「定式化作業(d^oing formulating)」の違いを考慮することによって明らかになるだろう。

我々は、我々の一行っている一ことを－多くの一言葉を一用いて〔その言葉通りに〕
いうという会話者の実践活動のことを、定式化を行うこと(d^oing formulating)〔＝定式化作業〕としよう。(FS:351) (〔〕内と下線は水川)

定式化作業とは、文字どおりの意味である「明瞭化」や「理論化」とは、別のことを示している。「定式化作業を行うこと」それ自体も、次の会話の資源としてのインデックス的表現となる。つまり、ある発話を定式化するという現象は、その発話の意味を決定するというよりも、定式化する発話と定式化される発話との間の独自の組織化として現れている。すなわち、定式化作業それ自体が、自然言語の組織化された現象としてなされているのである。先の例では、「次の発話は質問である」という定式化によって、文字どおりの発話上の効果を持つと共に、「質問の前置き」と「発言権の受諾」ということがわかるような「定式化作業」を適切に行っているということが、会話の流れを追っていけばわかるであろう。さらに、「では、こういう質問をさせて下さい」は、友人同士の会話においては自然になされる発話ではないだろう。むしろ、そういった発話が組織化されることによって「会議」や「審議」といった場面を生みだし、また同時にその場面に位置づけられることによって適切な発話として組織化されることになるのである。

さて、既に見てきたように、定式化は、客観的な事実を回復するという活動ではない。つまり、定式化によって〔我々の活動がアカウント可能に合理的¹⁰であるという事実〕を行っているわけではない。むしろ、定式化作業それ自体が、〔我々の活動がアカウント可

能に合理的であるという事実] への志向を示しているといえるだろう (FS:355)。従って、構築的分析が主張するように、定式化によって、形式的構造 (formal structures) が保証されるわけではない。こういった意味において、定式化作業は、実践的行為なのである。また、[我々の活動がアカウント可能に合理的であるという事実] は、定式化それ自体ではなく、定式化作業をはじめとする作業 (work) において行われると考えることができるだろう。H. Garfinkel と H. Sacks は、このような定式化をする際に、定式化とは異なった実践的諸活動である注釈作業の実践 (glossing practices) が行われているとした (FS:343, 362-66)。

では、そういった作業とは、どのようなものだろうか？本稿では、その作業について全体的な議論を展開する余裕はない。ただ、その端緒として、定式化における作業が、いかにして生起するかという問題を具体的に追っていききたい。次節では、「会話を定式化する作業」を、「会話において定式化という作業がいかにしてなされているか」という問題において扱っていききたい。

3. 精神科面接における定式化作業

(1) 会話の組織化と場面

これまでみてきたような定式化は、会話の流れにある特徴をもたせる。人々が会話をしている場面を見ると、会話の進行に、ある流れがあることがわかる。その流れは、時には速度を増し、時には滞るといったように常に同じ流れがあるとはいえないことがわかる。しかし、ある会話の流れを聞いたときに、それがあある特定の場面のものであることがわかることがある。また、ある特定の場面では、ある流れに従って会話がなされているということがわかるだろう。このような会話の流れのありかたを、会話実践の組織化のあり方と捉えることによって、会話と場面の関係を表しうることを示したのは、これまで述べてきた通りエスノメソドロロジーとその流れをくむ会話分析である。エスノメソドロロジー研究の関心は、アカウント可能 (account-able) な現象つまり、観察可能で報告可能な現象が、徹頭徹尾、実践的な達成 (practical accomplishments) であるということを、詳細な分析を通して提示することである (FS:342)。ここで、実践的達成とするのは、進行中の行為を扱うという点を強調するためである。こういったエスノメソドロロジー的関心を持つてみると、定式化作業は、会話の流れの独特な組織化として分析できることになる。以下では、これまでの考察をもとに、精神科面接の場面について例証していききたい。この精神科面接の場面においても、会話の流れをみることができ、また、その流れがあることがわかること自体が、精神科面接という場면을構成している。従って、ここでは、精神科面接を定式化に注目することによって、会話の組織化と関わりのある現象として分析することになる。

(2) データ

本稿では、次のような会話データを用いて例証していくことにする。これは、精神科の病院における、医師と入院している人との面接場面の会話である¹¹。

[データ:HH921106] (: 音の延長, (.) 0.5秒未満の沈黙, (1.5) 沈黙秒数, hhh 笑い声,
[発話の重なり, () 不明瞭な言葉, 左端の数字は行数)

- 1 A: じゃああの当時(.)友達と話せなかった理由はなんですか
 2 B: ん: : (8.0) けんかがこわいせいかな
 3 (2.0)
 4 A: けんかがこわい
 5 B: はい
 6 (3.0)
 7 A: ということは: (3.0) え (3.0) ということかな
 8 B: hhh
 9 (3.0)
 10 A: けんかがこわいから友達と話せない
 11 B: はい (1.5) なんかしあんしょ: みたいになって (0.5) む [か昔の症状はしあんしょ: でした
 12 A: [し
 13 A: しあんしょ:
 14 B: しあんしょ:
 15 (2.0)
 16 A: しあんしょ: いうのは:
 17 B: いっつも: もの もの (1.0) ごと (0.5) ものおもいにふけったり[: い
 18 A: [ああ
 19 B: くちからださなかった[り (.)は(.)はっきりしなかったり[
 20 A: [ん: [ん: あ思案に暮れるっ
 21 A: ていう[(ときの)]思案 はあはあはあ
 22 B: [そそそ] そ
 23 (.)
 24 A: あ: それ (いい表現ですね:) 思案症 [hhh hhh
 25 B: hh[hh hhh hhh
 26 (2.5)
 27 B: 誰が作ったんでしょうかね
 28 A: hhh (しっ) 自分で作ったんじゃないです[か hh hh
 29 B: [自分で hh
 30 (10.0)
 31 A: (じゃあ) (1.0) 入院: するころの状態というのは思案症だったわけですか?
 32 B: はい (1.5)

(3) 分析

ここでは、上記のトランスクリプトを分析することにより、定式化について考察していく。まず、このトランスクリプトを読んで、わかることがいくつかある。それは、どちらが医師で、どちらが患者であるか、説明がなくてもわかっただろうということである。それは、「質問－応答」の配置の仕方が、AとBでは、非対称的になされていることがみてとれるからである。その「質問－応答」の配置の非対称性が、「医師－患者」というカテゴリーセットを観察可能にしているといえる。もっと一般化すれば、「専門家－素人」と

いうセットである(西阪 1990:6-7)。この二つが非対称的に組織化されることが、「医師」や「患者」というカテゴリーが観察可能になるということと同値である。このようなカテゴリー使用は、自然言語の使用を分析する際に中心点となり、場面を見てわかるという事態において考えた場合、行為者の問題であると同時に観察者の問題となるのである。

さて、ここでは、どのような発話が配置されているのだろうか。医師は質問(問診)し患者が答えるという機械的な配置にはなっていないことに注意すべきである。実際の会話では、発話の中断や、沈黙、ポーズ、言い直し、言い換えといった発話行為の連鎖の中で「質問-応答」というペアがなされるのである。例えば、1行目でAは、「……なんですか」と質問をして、2行目で答えている。ところが、「けんかがこわい」(4行目、以下数字のみ記入)は、文として独立させた場合、「質問」ではない。主語がA自身で、「(私は)けんかがこわい」という感情の記述ともとれる発話である。しかしながら、「専門家-素人」というカテゴリーセットがレリバントとなる精神科の面接において、Aが発話することによって、「けんかがこわい」は、「質問」あるいは「確認」となっているのである。それは、直後に「はい」(5)という応答がなされていることからわかる。精神科の面接において、専門家は、素人に病状や日常の出来事を語らせる義務を負っているとみえるのは、このように発話の配列が組織化されることによってなりたっている。

「ということかな」(7)は、質問であるがゆえに、次に笑いがくることによって、答えの欠如がアカウント可能になる。「医師」が、語らせることができなかったということが同時に見えてとれるために、その答え(第二ペア)が不在で終わらないために、繰り返しが続いてくる。面接という場面では、「専門家-素人」というセットがあるために、「専門家」は「素人」の問題を定式化し、「素人」は、「専門家」に対しその定式化のための情報を提供することになる(西阪 1990:6)。7行目の発話が興味深いのは、「～ということはどういうことかな」という定式化作業を「専門家」が「素人」に委ねる形式をとっている点である。ここでは、「専門家」が「素人」に理由を説明を要求するのは不適切に聞こえるため、文字通りに、定式化を求めているとアカウントされない。そのために、「非難」や「問い詰め」つまり「だからどうしたの?」という発話に聞こえることになる。

7行目の発話に対して、定式化によって対応することが「素人」カテゴリーの発話者には、不適切となるため、8行目の笑いが起こっていると考えられる。次の10行目の繰り返しは、4行目と同様にただ単に前の発話の言い直しや繰り返しではない。答えの不在を指示して、前の質問の継続と共に次の発話を促している。それと同時に、定式化を「患者」に委ねることをしたのだということをもう一度繰り返して言っていることになる。

そうだとすると、11行目の「しあんしょ:でした」は、この場面では不適切な発話に聞こえる。それは、「思案症」という症状や病気が存在しないから定式化が不可能なためではない。むしろ、「患者」カテゴリーの発話として聞き取りにくいからであろう。「医師-患者」というカテゴリーには、「症状を判断する-それを聞く」というカテゴリー付帯活動(category bound activities)が伴っている(Sacks 1972)。それゆえ、「しあんしょ:」という音の連なりが「患者」カテゴリーから発話されることは、カテゴリーとその活動の付帯を脅かすものである。仮に「しあんしょ:」という発話が、「医師」カテゴリーから適切に発せられるとするなら、この音の連なりは、「しあんしょう」という「症状」であると自然に聞き取ることができる。そして、この発話は、症状の定式化として組織化され

ることになっただろう。しかし、ここでは、「患者」カテゴリーによって発話されたために、「しあんしょ：」という音の連なりが、症状の名前として聞こえてこないのである。さらに注目すべきは、途中の沈黙である。これは、それ以前の「しあんしょ：みたいになって」(11)という発話が一応の完結をしているため、話し手の交代の可能性を含む場所になっている(Sacks;Schegloff;Jefferson 1978)。そのため、Aが順番(turn)をとらないことが観察可能になり、応答(定式化)が不十分なことが示され、もう一度、発話を繰り返す。その際に、「昔の症状は」と入れていることも注意すべきである。これは、前の発話のインデックス性を矯正し、「いつ」「何が」という点を明確にするという志向性を持つ定式化作業ということができる。さらにここでも、「症状」と入れているにもかかわらず、「しあんしょ：」が「思案症」と聞こえないということも、「患者」カテゴリーの付帯活動として適切でない(自然でない)からということができる。

13行目の「しあんしょ：」というAの発話も同様である。この発話は、病名を「医師」が聞いているため、「質問」とは聞きにくいのである。逆に、もしも「医師」が「しあんしょ：でした」といった後に、「しあんしょ：」と患者カテゴリーの人が言ったなら、この音の連なりは、「質問」となり、次に「応答」が続くことが志向されるだろう。この「しあんしょ：」という発話は、「医師－患者」カテゴリーに敏感になることによって、いわば、宙づりになり、次の発話に接続していくことになる。14行目の「しあんしょ：」により、13行目の発話と結びつき「確認－確認」というペアを構成してしまう。

そのため、16行目では、もう一度「質問」であることを明確にすることになる。17行目と19行目では、「応答」を例示によって行っている。20,21行目では、「了解」を示している。しかし、Aが「医師」カテゴリーであることは、21行目の笑いによっても示されている。仮に、「医師」の定式化(診断)に対し、「患者」が笑いによって応えるなら、そこは有徴化され「非難」や「問いつめ」などという別の形式の組織化がなされることになるだろう。それに対し、ここでは、「患者」＝「素人」の定式化に対して、「医師」＝「専門家」は、それを無化するという作業をすることになる。そして、その作業は、有徴化されることなく、自然な流れと受けとめられる。

24行目の「評価」も、28行目の「応答」も、「患者」の定式化を無化する作業を繰り返していることになる。さらに、このような会話の組織化を経ることによって「しあんしょ：」が「思案症」へと特定されることになる。たとえ、それが、同じ発音でなされていようと、音の連なりとして発せられたものというだけでは、社会的な意味は生まれてこない。このようにして、語の意味は、語の使用によって達成(遂行)されていくといえるだろう。

31行目からは、その「思案症」という語を使って、「医師－患者」カテゴリーによる自然な面接の場面が継続していくことになる。

以上でみてきたように、定式化作業は、行為者カテゴリーとその付帯活動を通じて独自に組織化されている。また、その組織化のあり方そのものが、行為者カテゴリーとその付帯活動のありかたを示しているのである。

4. 結語

現実に生起する場面において、定式化する(formulate)ということは、その場面とは独立

の超越的な公理や理論を現前させることではない。こういった意味で、定式化は、「メタレベル」の言及ではなく(Lynch 1993:187)、専門家が独自に所有している手続きでもない。むしろ、その場面に位置づけられ、組織された定式化作業として行われる。すなわち、定式化作業は、実践的行為として「アカウント可能に合理的な活動」を行っているのである(FS:358)。H.GarfinkelとH.Sacksの試みとは、このように定式化を含む実践的行為がどのようにして「アカウント可能に合理的活動」に編成されるか、自然言語の使用という面から探求していくことであり、本稿は、その例証を試みたものである。

註

¹ 本稿は、日本学術振興会特別研究員に交付する文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。また、本稿は、多くの方々とディスカッションの末に作成できたといえる。関係各位に感謝したい。特に、University of Manchester滞在中において、同学のDr. W.Sharroock、Dr.R.Watson、Boston UniversityのJ.Coulter教授、Brunel UniversityのDr. M.Lynchをはじめとする研究者・大学院生に。「いわゆるミクロ研究会」（於：東京都立大学）の方々、特に椎野信雄氏に。さらに、「精神医療の現場をもっと知る会」（於：東京大学医学部）の方々に。ただし、本稿は、これらの方々のご意見を反映していない可能性もある。もちろん、本稿の最終的な責任は筆者にある。

² これに関しては、一ツ瀬病院（宮崎県）に一週間の体験入院を含むフィールドワークの成果である（1992年11月3日～7日と1993年11月24日～12月3日）。同病院の佐々木達郎院長、藤田淳郎医師、益田由美氏、柳井玲子氏をはじめとするスタッフの方々と、入院されている方々には、たいへんお世話になり、ご意見も伺うことができた。また、面接に参加された方には、会話資料の研究利用を快諾いただいた。感謝したい。

³ この意味においては、エスノメソドロジーは、現象学の流れに入ることはない（清水 1992:15）し、いわゆる「意味学派」ではない（水川 1992）。また、社会科学を実証主義と理念主義の二大潮流として社会的に捉えた業績として富永(1993)がある。

⁴ 例えば、「動機」「自己」「社会化」「権力」といった近代以降に生まれた「形而上学的」用語を使用した社会学的物語の解剖（分析）とその疑似問題の解消・解決である。

⁵ 一方で、こういったいわゆる思想的な基盤の対立あるいは相違にもかかわらず、近年の認知科学を中心とする「実証主義的」分野での、言語行為論への接近、もっと言えば、会話分析やエスノメソドロジー的発想への接近あるいは、歩み寄りがみられることは興味深い（佐伯・佐々木編 1990、Winograd:Flores 1986=1993）。これには、人工知能を考える際には、いわゆる「認知」を、主体や個体（すなわち人工知能）の「意識」や「意味付与」へと単純に還元できないばかりか、従来の合理主義的な発想に基づくシステムやフレームという発想への限界という大きな問題が存在していたのである（Winograd:Flores 1986=1993: 53,107）。こういった考えは、認知心理学において「分散認知」として研究されている（日本認知心理学会編 1994）。また、ここで述べたエスノメソドロジーと隣接領域の系譜的考察は、別の機会で行いたい。

⁶ 「社会学を行うこと」と「実践的な社会学的推論」は清水(1992:4-6)が詳述している。

⁷ この非対称的(asymmetry)という用語は、H.GarfinkelとL.Wieder(1992)による。また、エスノメソドロジーと構築的分析の非対称性は、C.S.Peirceの「ブラグマティシズム」に

親しんでいる人なら、第二性(secondness)の独自性の議論との共通点を見いだすだろう(Perce 1931-35=1985:90-99)(米盛 1981:77,83-84)。特に、H.Garfinkelの近年の中心概念であるhaecceityとthisnessが、C.S.Peirceの第二性で主として言及されている点に注意。

⁸ メンバーとは、自然言語の習熟を指す。特定の言語共同体の成員ではない(FS:342)。

⁹ []で囲まれる部分は、定式化作業を示す。

¹⁰ ここでいう「アカウント可能に合理的」とは、端的に「見て言える(looking-and-tell-ing)」「観察可能で報告可能である(observable-and-reportable)」ことを指す。また、rationalの訳語に条理的(不条理の対語)を使う論者もいる(清水 1992:18)。

¹¹ この面接は、担当の医師が、入院している人に対して、病状や入院生活について問診したものである。いつものとおり、一対一でナースルームの奥にある面接室で、約30分間にわたって行われた。ただし、今回は、筆者が、面接室に入り見学・録音した。入院していた方の病状等は、本稿の議論とは、さしあたり独立した問題なので、言及しない。また、この分析により、「精神病」であり「日常生活能力がない」とされる人も、他の人と同様に、実践的な社会学的推論を行うことにより会話実践を遂行していることもわかる。

参考文献

- Coulter, J. 1979 The Social Construction of Mind, Macmillan.
- Fehr, B. J.; Stetson, J.; Mizukawa, Y. 1990 "A Bibliography for Ethnomethodology" in J. Coulter (ed.) Ethnomethodological Sociology, Edward Elgar.
- Garfinkel, H. 1967 Studies in Ethnomethodology, Prentice-Hall.
- Garfinkel, H.; Sacks, H. 1970 "On Formal Structures of Practical Actions" (FS と略記) in J. C. McKinney; E. A. Tiryakian (eds.), Theoretical Sociology, Appleton-Century-Crofts, 337-66. [椎野信雄ほか訳「実践的行為の形式的構造に関して」, 未公開]
- Garfinkel, H.; Wieder, D. L. 1992 "Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis" in G. Watson; R. M. Seiler Text in Context, Sage.
- 橋爪大三郎 1991 「社会学と隣接諸科学」, 今田高俊・友枝敏雄編『社会学の基礎』, 有斐閣.
- Heritage, J.; Watson, D. R. 1979 "Formulation as Conversational Objects" in Psathas, G. (ed.) Everyday Language, Irvington, 123-162.
- 石黒ひで 1993 「『言語論的転回』とはなにか」, 新田義弘ほか(編集委員)『言語論的転回』(岩波講座 現代思想4), 岩波書店, 87-116.
- 海保博之・原田悦子編 1993 『プロトコル分析入門』, 新曜社.
- 柄谷行人 1986 『探求 I』, 講談社.
- Livingston, E. 1986 Ethnomethodological Foundation of Mathematics, RKP.
- Lynch, M. 1993 Science Practice and Ordinary Action, Cambridge University Press.
- Maynard, D. 1991b "Interaction and Asymmetry in Clinical Discourse" A. J. S. 97(2): 448-495.
- Maynard, D.; Clayman, S. E. 1992 "The Diversity of Ethnomethodology" Annual Review of Sociology, 17:385-418.
- メイナード, 泉子 1993 『会話分析』, くろしお出版.
- 水川喜文 1992 「エスノメソロジー再考」『社会科学ジャーナル』, 国際基督教大学社

- 会科学研究所, 30(3):143-165.
- 1993a 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロギス』17:79-91,
ソシオロギス編集委員会.
- 1993b 「ポスト会話分析のエスノメソドロジー」日本社会学会報告要旨.
日本認知社会学会編 1994 『認知社会学の発展 第7巻 分散認知』, 講談社.
- 西原和久 1991 「複眼の社会理論」, 西原和久編『現象学的社会学の展開』, 青土社.
- 西阪仰 1992 「心理療法の社会秩序 I」, 『明治学院大学社会学部付属研究所年報』
20:1-24.
- 岡田光弘 1994 「エスノメソドロジーを解剖する」, 日本現象学的社会学研究会報告要旨.
- 大庭健 1990 『はじめての分析哲学』, 産業図書.
- Peirce, C.S. 1931-35 [米盛裕二編訳『パース著作集 現象学』, 勁草書房, 1985]
- Rorty, R. (ed.) 1967 The Linguistic Turn, University of Chicago Press.
- Sacks, H. 1972 "On the Analysability of Stories by Children" in J.J.Gumperz; D.
Hymes (eds.) Directions in Sociolinguistics, Holt, Reinhart and Winston.
- Sacks, H.; Schegloff, E.A.; Jefferson, G. 1974 "A Symplest Systematics for the Organi-
zation of Turn-Taking in Conversation", Language 50(4):695-735.
- 佐伯胖・佐々木正人編 1990 『アクティブ・マインド』, 東京大学出版会.
- Schegloff, E. 1972 "Notes on a Conversational Practice: Formulating Place",
in D.Sudnow (ed.) Studies in Social Interaction, Free Press.
- Schwartz, H. 1976 "On Recognizing Mistakes: a Case of Practical Reasoning in
Psychotherapy", Philosophy of the Social Science, 6:56-63.
- Suchman, L. 1987a Plans and Situated Action, Cambridge University Press.
- ザトラウスキー (Szatrowski, P.) 1993 『日本語の談話の構造分析』, くろしお出版.
- 椎野信雄 (未公開) 「EM研究のためのノート」
- 清水学 1992 「実践的社会学的推論と社会学的物語批判」『ソシオロギ』, 36(3):3-19.
- 竹市明弘編訳 1992 『超越論哲学と分析哲学』, 産業図書.
- 富永健一 1993 『現代の社会科学者』, 講談社 (初版1984).
- 富田恭彦 1993 「言語行為論とプラグマティクス」新田義弘ほか(編集委員)『言語論的転
回』, (岩波講座 現代思想4), 岩波書店.
- 渡邊二郎 1991 『現代哲学』, 放送大学教育振興会.
- Watson, D.R. 1993 "Some Potentialities and Pitfalls in the Analysis of Process
and Personal Change in Counselling and Therapeutic Interaction", in Siegfried,
J. (ed.) Professional and Everyday Discourse as Behavior Change, Ablex.
- Winograd, T.; Flores, F. 1986 Understanding Computers and Cognition, Ablex. [平賀譲
訳『コンピューターと認知を理解する』, 産業図書, 1989]
- 山田富秋 1993 「精神科におけるインタビューの会話分析」, 日本社会学会大会発表要旨.
- 山崎敬一 1993 「ガーフィンケルとエスノメソドロジー的関心」, 佐藤慶幸・那須壽編『危
機と再生の社会理論』, マルジュ社.
- 米盛裕二 1981 『パースの記号論』, 勁草書房.